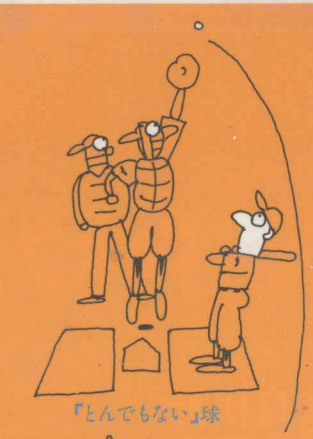
現代形容詞用法辞典

飛田良文・浅田秀子——著



『とんでもない』球

『突拍子もない』球

『とてつもない』球

【とんでもない】常識にはずれていて嘆かわしいほど程度が高い様子を表す。程度が高いことについて慨嘆の暗示のある点がポイントである。程度の高いことを表す類語としては、「とっぴょうしもない」「とてつもない」などがあるが、「とっぴょうしもない」にはあきれや驚きの暗示のある点が、「とてつもない」はやや客観的で特定の感情を暗示しない点が、それぞれ異なる。

東京堂出版

現代形容詞用法辞典

飛田良文・浅田秀子 著

東京堂出版

著者略歴

飛田良文（ひだ　よしふみ）
昭和八年千葉県に生まれる。昭和三八年東北大学大学院文学研究科博士課程修了。現在、国際基督教大学教授。国語学会評議員。朝日カルチャーセンター日本語教師養成講座講師。編著に『明治のことば辞典』（東京堂出版）『英米外来語の世界』『日本語・中国語意味対照辞典』『日本中国慣用句対照辞典』（以上南雲堂）などがある。

浅田秀子（あさだ　ひでこ）
昭和二八年東京都に生まれる。昭和五二年東北大学文学部国語学専攻卒業。出版社勤務を経て、昭和六一年九月より一年間、中国・河北大学外文系日語科にて日本語教師。現在、「日本語コスモス」代表。防衛大学校非常勤講師。著書に『現代副詞用法辞典』（共著・東京堂出版）『日本語の宝石箱』（講談社）などがある。

現代形容詞用法辞典

平成三年七月二〇日　初版発行
平成一〇年七月一五日　四版発行

著者　飛田良文
浅田秀子
発行者　大橋信夫
編集　有限会社日本語コスモス
本文組版　有限会社アートジュール
印刷所　株式会社平河工業社
製本所　株式会社徳住製本所

発行所　株式会社　東京堂出版
東京都千代田区神田錦町三ノ七（〒101-0054）
電話　東京三三二一三四一　振替　00130-7-270

ISBN4-490-10292-5 C0581
Printed in Japan

© Yoshifumi Hida　1991
Hideko Asada

はしがき

日本人が日本語を使って話したり聞いたり書いたり読んだりするときには、その言葉の意味を正確に把握し理解していなければならない。本来、言葉のひとつひとつについては、国語辞典がその意味や用法をくわしく記述する役割をになうはずであるが、現実には語数・ページ数などの制約があり、国語辞典によって言葉のひとつひとつの意味・用法を精密に知ることはむずかしい現状である。

日本語学の分野では、近年、意味の研究が盛んになり、基礎語や動詞については特に著しい。しかし、形容詞・副詞をはじめとする修飾語のはたらきをする言葉については、これまでその意味を記述する試みがほとんどなされていない。本書は、日本語の形容詞を網羅し、その一語一語について意味・用法を客観的に記述した最初のものである。

一方、目を世界に転ずれば、世は国際化の時代である。外国人に日本語を教える日本語教育が叫ばれ、外国人の日本語学習者の数は年々うなぎのぼりに増えている。ところが、実際に日本語教育にたずさわってみると、日本語の運用能力が高まったからといって、コミュニケーションに対する障害はそう簡単には解消しない。留学生たちは、日本語による授業・日常会話をほぼ完全に理解できるほど日本語レベルが高くても、いくら説明してもわかってくれないことが往々にしてある。彼らの行動やその基本にある考え方にわれわれが首をひねる場面も少なくない。

こういう外国人との、ものの考え方の違いによるトラブルは、日本語教師だけの問題ではない。国家間の交渉から同じ下宿に住む留学生とのトラブルにいたるまで、日本人全体の問題なのである。

これらの原因の最も大きなものとして、日本人は、外国人のものの考え方を理解しようと努力するばかりで、みずからの文化やものの考え方を積極的に外国へ向けて発信しようとする意志も方法も、今までは欠けていたことがあげられる。人に教えるには、まず自分が十分に理解していなければならない。日本人がある事物をどう見るかは、それをどんな言葉で説明しているかを分析することによって明らかになる。すなわち、日本人が事物を説明している言葉……修飾語（形容詞・副詞など）の意味・用法を精密に分析し記述していくことが、日本人の文化やものの考え方を解明することになるのである。

本書は、日本語研究および日本語教育の基礎として、形容詞の意味・用法を精密に記述した最初のものである。と同時に、国際交流の場において日本人の文化やものの考え方を外国へ向けて発信していくための布石でもある。

本書は、このような認識を同じくする著者が基本方針を話し合い、草稿を浅田が執筆し、飛田が綿密な校閲・修正を加え、さらに両者で検討のうえ完成したものである。表現は、できるだけ専門用語を使わずに平易を期した。本書によって日本語そのものの研究がますます発展するとともに、日本人の文化や心が外国人に理解され、スムーズなコミュニケーションと国際交流が行われることを願うものである。

最後に、東京堂出版の菅原洋一氏にはいろいろ御世話になった。記して感謝の意を表する。

平成三年五月三十日

飛田良文
浅田秀子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡例

一　本書における「形容詞」は、学校文法でいう形容詞・形容動詞・連体詞・連語・慣用句、動詞の打消し形を対象とし、その中から一〇一〇語を選定した。

二　「形容詞」の一語一語については、意味・用法・イメージ・ニュアンス、類義語との相違、関連語句を各項目ごとにくわしく記述した。

三　見出し語の配列は五十音順である。

四　各見出し語には、見出し、用例文、解説、参照項目の欄をもうけた。

(1)　見出しは、ひらがな表記、漢字表記、ローマ字表記を掲げた。漢字表記は日常目にするもので、常用漢字にはかぎらない。ローマ字表記はヘボン式を採用した。

(2)　用例文は、その語の意味・用法を網羅するよう作例によって示し、大きな意味区分ごとに分類した。また、「形容詞」そのものだけでなく、「―さ」「―み」「―げ」などの派生語や、「―ない・―ません」など丁寧形のあるものは、適宜用例として採用した。

(3)　【解説】での意味・用法は、用例文の分類にしたがって記述し、特にその語に暗示されている心理やニュアンスを、日本人共通の評価である七段階のイメージ、キーワードの組み合わせ、類義語との比較により明示した。詳細は「本書の特色と使い方」参照。

(4)　参照項目は、反対語・類義語、造語成分や複合語など、本書に掲載されている関連語をすべて掲げた。

五　巻末の付録には、次のものを掲げた。

(1)　現代形容詞イメージ一覧

(2)　下接要素による分類語構成表

(3)　索引

「形容詞」から日本文化を解明する

日本人の国際化という言葉は、聞かれない日がないくらいわれわれの耳に親しいものとなった。そのために、外国人に日本語を教え、それと同時に日本人のものの考え方や感じ方――広い意味での日本文化を伝えていこうとする考えも、すでに社会の中に定着しつつある。

しかし、現実に日本語教育や日本文化の発信ということが、これらの社会常識にみあうくらいに実行され達成されているかというと、必ずしもそうは言えない。それどころか、国際社会でも日常生活レベルでも、外国人とのトラブルはたえまなく起こっている。

その最も大きな原因の一つは、外国人に日本語や日本文化を伝えるための方法が確立されていないこと、そして何より、われわれ自身が日本文化というものを客観的に認識していないことにある。人に教えるにはまず自分が十分に理解していなければならない。これは日本語教師だけの問題ではない。日本人全体の問題なのである。留学生や外国人労働者の増えた今日、外国人と接触する機会はわれわれの身近にいくらでもあるのだから。

本書は、われわれ日本人の文化とはどのようなものか、その特色は何かを客観的に解明しようとする新しい試みである。

■修飾語を手がかりに日本文化を解明する

ひとくちに日本文化を解明すると言っても、何を手がかりにするかによって、さまざまなアプローチのしかたがある。われわれは以前から、日本語教育にたずさわる者として、日本語それ自身のなかに日本文化そのものが表れているという確信をいだいていた。その証拠に、日本語は語彙数が豊富なだけでなく、表現形式が多様であり、言語以外の手段（たとえば身振りなど）に頼らなくてもコミュニケーションが十分成り立つからである。

それでは、日本語のどこに日本文化が表れているかというと、これは日本語を外国語に翻訳するときのことを考えると明らかである。

「主語ガ（ハ）述語ダ（スル）」という文は客観的事実に比較的近いので、そのまま外国語に翻訳することが可能である。「女が歩く」という文を A woman walks. という文に置き換えることは可能である。ところが、この主語や述語に説明する言葉（修飾語）がついて、「あだっぽい女がしゃなりしゃなりと歩く」という文になると、とたんに翻訳ができなくなってしまう。これはなぜだろうか。

「あだっぽい」や「しゃなりしゃなりと」という修飾語には、対象のどういう状態を「あだっぽい」や「しゃなりしゃなりと」という言葉で表すかという、日本人共通の歴史的なものの見方が反映されている。言い換えれば、日本文化そのものがこれら修飾語の中に凝縮されているのである。だからこそ、「あだっぽい女がしゃなりしゃなりと歩く」を外国語に翻訳するのがむずかしいのである。ここにヒントがある。

すなわち、日本文化を探るにはこれら修飾語を手がかりにすればよいのである。日本人は、どういう状態をどういう言葉で説明するか、そのときにどんな気持ちをこめているか、これらを客観的に記述することができれば、日本文化を客観的に認識し、外国へ向けて発信していくというひとつの道が開けるのではなかろうか。

日本語表現

〔修飾語A〕あだっぽい　〔修飾語B〕しゃなりしゃなりと　女が〔主語〕　歩く。〔述語〕　客観的事実　日本人共通の文化

■形容詞・副詞は日本民族の文化の宝庫である

修飾語とひとくちに言っても、主語を説明する修飾語Aと述語を説明する修飾語Bでは、構成される品詞からして異なる。日本語の場合やっかいなことに、この両方に用いられるもの、片方だけに用いられるもの、述語にもなれるものなどがあり、英語の形容詞・副詞のようなはたらきの区分による品詞分けでないので、記述のしかたがむずかしい。学校文法によれば、日本語の修飾語A・修飾語Bのはたらきをする言葉は、次のような品詞で構成されている。

修飾語A……形容詞・形容動詞・連体詞・連語
修飾語B……副詞・形容詞・形容動詞・連語

形容詞や副詞に代表される修飾語には、日本文化が凝縮されている。言い換えれば、形容詞・副詞は日本民族の文化の宝庫なのである。

本書は、日本文化の宝庫としての修飾語をとりあげるもので、本来ここに掲げてあるすべての品詞を対象とすべきではあるが、紙幅（しふく）の制約もあり、おもに修飾語Aのはたらきをする言葉（形容詞・形容動詞・連体詞・連語——本書では便宜上一括して「形容詞」と呼ぶことにする）をとりあげ、そのひとつひとつについて、意味・用法を精密に記述し、その内部にある日本文化を探ろうとするものである。修飾語Bを代表する副詞については、別の機会にゆずる。

■日本文化はどのように内蔵されているか

そもそも、日本文化は「形容詞」の中にどのように内蔵されているかといえば、それは次のようになると考えられる。

すなわち、「形容詞」の意味は、大きく分けて二層の構造をしており、中心には「意味の核」がある。これは、場面や状況、使用者のそのときの心理に影響されることが少ない固着した部分で、知的・客観的に記述することが可能であり、外国語に翻訳しても誤解の少ない部分である。

この「意味の核」の中には、本来的な意味ともいうべき知的概念のほか、色彩・温度・大小などの意味のジャンル、文章中で用いるか日常会話か、また俗語かといった文体上の特色、述語で用いるか修飾語で用いるかといった文法上の用法、だれがだれ(何)に対して用いるかといった使用者・対象の制限などの要素が含まれる。

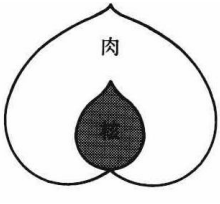
「意味の核」の外層に「意味の肉」の部分がとりまいている。じつはこの部分こそ「形容詞」としての特色をなす部分で、「形容詞」には日本文化が内蔵されていると言う場合には、「形容詞」の意味としてこの「意味の肉」を念頭においているのである。

この「意味の肉」は、「意味の核」を実際に表現するに際して、日本人がどのようなイメージをいだくか、どのようなニュアンスで用いるか、そこにこめられる心理はどのようなものかという、きわめて情緒的な色あいの濃いものであって、日本人共通の文化はここに内蔵されており、客観的に記述したり外国語に翻訳したりすることがむずかしい部分である。

「形容詞」の意味	
意味の核	意味の肉
知的概念 意味のジャンル 文体上の特色 文法上の用法 使用者・対象の制限	イメージ ニュアンス 暗示されている心理 (日本人共通の文化)
翻訳可能	翻訳不可能

「意味の核」と「意味の肉」はたとえて言えば、桃の実のようなものである。桃の実の中心には固着した種子があり、これなくして桃は成り立たない。

「意味の核」はこの種子に相当する。しかし、われわれが桃の価値を認め味わうときに必要なのは、種子ではなくてまわりの果肉の部分である。「意味の肉」がこの果肉に相当する。「形容詞」の存在意義も味わいも、この「意味の肉」にこそあるのである。



「あさましい」「きまずい」「こころぐるしい」「りちぎ」など、日本文化の特徴を最もよく示す「形容詞」の意味を記述するには、この「意味の肉」の存在を認めなければ、とうてい不可能である。

語によっては、「意味の核」が複数個あるものもある。これには「あらい」「おもい」「たかい」などの、いわゆる多義語の「形容詞」が入る。また「意味の核」と「意味の肉」の割合も、「核」が大きくて「肉」の薄いもの（「あかい」「うすい」「しずか」など）や、「核」と「肉」の境界が定かでなく、全体に「肉」のような味わいのあるもの（「あさましい」「きらびやか」「みみっちい」など）があり、一概に「形容詞」と言っても、さまざまな特色をもった語が存在することがわかる。

本書の特色と使い方

本書は、現代日本語の「形容詞」（形容詞・形容動詞・連体詞・連語を指す）を一〇一〇語選定して五十音順に配列し、そのそれぞれについて、紙幅の許すかぎり豊富な用例を掲げ、その意味・用法・イメージ・ニュアンス、類義語との相違、関連語句について個々にくわしく記述したものである。

意味の記述にあたっては、漢字表記や既成の文法による意味区分によらず、できるだけ日本語としての「形容詞」そのものの意味を分析して、直接記述するよう心がけた。そのため、意味の区分や記述の方法において、従来の国語辞典と異なっている点が多々ある。

一　見出し語の選定について

すでに述べたとおり、日本文化を内蔵する典型的な言葉という意味での「形容詞」を選定することに努めた。

なかでも、これまで単語と認められなかったために、国語辞典ではあまりかえりみられることのなかった連語・複合語、動詞の打消し形（「あきたりない」「かなわない」「わからない」「にべもない」「にっちもさっちもいかない」「お

しもおされもしない」など）は積極的に採用した。

また、日常の会話やテレビドラマなどに頻出し、慣れ親しんでいる俗語（「やばい」「ださい」「がめつい」「けったくそわるい」など）や使用者が多いと思われる方言的な語（「あほくさい」「おかったるい」「ぼろい」など）も、記述できる範囲でできるだけとりあげるよう努めた。

さらに、他の語について形容詞を作る造語成分（「―らしい」「―がましい」「―ぽい」「―たらしい」など）も個別にとりあげた。これらは従来の学校文法において、接尾語扱いされたり助動詞扱いされたりして文法上の位置が定まっていなかったため、まとまった解説があまりほどこされなかった語群である。

これらの成分を使った複合形容詞のうちの代表的なもの（「おとこらしい」「みれんがましい」「あかっぽい」「みじめったらしい」など）は単語として見出しにとりあげたが、それ以外のものは、これらの成分をとりあげることで、「形容詞」全体をカバーできるようにした。

一方、漢語の形容動詞は数が膨大なうえ、概念そのものを表す名詞との区分が明確でなく、日本文化を内蔵していると思われる可能性が低いので、大部分は省略した。

また、いわゆる「こそあど」言葉も割愛した。これらは多品詞にわたって体系づけられているので、「形容詞」だけを分離して記述する意味が薄い。そして何より、「こんな」「そういう」などの語は、それだけでは指示される具体的な内容がわからないので、「意味の核」のない言葉になっているからである。

二　見出し語の表記について

一で選定した「形容詞」を、ひらがなで表記した。同じような意味で、同じように使われると思われる別の語形は、併記して示した。これらのうち、意味・用法に多少の違いがあるものは、「解説」の中で説明してある。

三　漢字表記について

文芸作品や文書などで目にする機会があると思われる漢字表記を掲げた。必ずしも「常用漢字表」の音訓にはよっていない。

また、複数の漢字表記が通用していて、それらの漢字の違いによって意味を区分することがある語（「熱い・暑い」「尊い・貴い」など）についても、漢字表記を併記するにとどめ、漢字表記の違いによって語そのものを分類することはしていない。これは、漢字表記の違いと「形容詞」の語としての意味区分とは、必ずしも厳密には一致しないからである。ただし、これらについては、「解説」の中で、一般的な傾向としてどの漢字を使うという形でふれておいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

四　ローマ字表記について

日本語学習者の便宜をはかるため、ヘボン式つづり方によるローマ字の見出しを掲げた。

五　例文について

当該「形容詞」の意味を典型的に表すと考えられる用例を、「話す・聞く・書く・読む」のすべての面にわたって検討し、できるだけ多くの意味・用法を示せるよう、紙幅の許すかぎり数多く作例した。このとき、例文の使用状況がわかるよう、できるだけ主語・述語のそろった作例を心がけ、内容が不明確になりがちな「この・そんな」などの指示語の使用は慎重に制限した。

用例文は、当該「形容詞」の述語・修飾語・独立語としての用例をそろえ、語によっては、「―さ」「―み」などの語尾をもつ派生語の名詞の用例や、「―ない」の丁寧形である「―ません」の用例を加えたところもある。

文芸作品からの採録は意識的に避けた。これは、本書の目的のひとつである、日本人共通の文化を探るためには、作家個人の特殊なものの見方や感じ方が反映されている可能性の高い文芸作品の用例は不適当だからである。

これと反対に、ことわざ・標語・慣用句・CM・民謡からは、積極的に採録するようにした。これらは、不特定多数の民衆によって使用され、日本人共通の文化を最も典型的に内蔵していると思われるからである。

例文中の当該語は、原則としてすべてひらがな書きとし、目だたせるために太字にした。ただし、現代語用法などではカタカナ書きにしたものもある。

現代の日常会話においては、「かわいい」「スバラシー」「スルドイ」などのように、「形容詞」を感動詞的に用いて、特定のニュアンスをこめる用法が少なくない。本書においては、現代語に特有の意味・用法は積極的にとりあげるよう努めた。例文の(1)・(2)などの意味区分は、次項の解説中の(1)・(2)などと対応している。

六　解説について

「形容詞」の意味を、「意味の核」と「意味の肉」に区別して記述する姿勢を貫いた。まず、「意味の核」にあたるもので分類し、(1)・(2)などで示した。これらは、前項の例文の(1)・(2)などの区分と対応する。

「意味の核」にあたる部分は、「解説」の最初に、「□□を表す形容詞。……の様子を表す。修飾語として用いられる。大人の女性について用いるのが普通である」などという形で記述されている。

最もあいまいで説明しにくい「意味の肉」を記述するにあたっては、次の三つの方法を用いた。

①　イメージ表記

日本語の「形容詞」には、「あさましい」「うつくしい」などのように、どんな人がどんな場面で用いても、評価の一定している語がたくさんある。「あさましい」ではどんな場面でどんな人が用いても、ほめている意味にはならず、必ず慨嘆（がいたん）し嫌悪（けんお）しているニュアンスがあるから、評価はマイナスである。「うつくしい」はこの反対にプラスである。

これに対して、「たかい」「あつい（暑・熱）」などのように、使用する人や状況によって評価が揺れるものもある。従来、形容詞に関して「評価」という言葉を持ち出して説明をするしかたはあるにはあったが、「たかい」や「あつい」のように使用者や状況による個々の条件に左右されるものまで、プラスマイナスの評価を決めてしまっていることが多く、必ずしも客観的なものとは言えなかった。

本書では、その場の状況に関係なく、日本人ならだれしも同じような評価をもつもの＝日本人共通の評価を「形容詞」のもつ「イメージ」と名づけ、便宜的に下表の七段階に区分して示した。

右の例で言えば、「あさましい」は「マイナスイメージの語」、「うつくしい」は「プラスイメージの語」、「たかい」「あつい」は「プラスマイナスのイメージはない」ということになる。

本文中の表現	程度
プラスイメージの語	＋＋＋
ややプラスイメージの語	＋＋
ややプラスよりのイメージの語	＋
プラスマイナスのイメージはない	0
ややマイナスよりのイメージの語	－
ややマイナスイメージの語	－－
マイナスイメージの語	－－－

② 類義語との比較

類義語と比較して「形容詞」の意味をくわしく分析していこうとする試みは従来からあったが、その多くは、類義語のいくつかを意味の共通するものでグループにし、その違いを記述しようとするものであった。ところが、現実には「形容詞」の類義関係は、多義語になればなるほど複雑な対応をしており、単純なグループ化は不可能である。

そこで本書では、当該の意味（(1)・(2)のレベル）で似ている語をそのつど紹介し、比較していく方法をとった。これは、一語一語個別に記述して初めて可能なことである。類義語との比較のしかたとしては、次の三つの記号と方法を用いて、例文を比較した。

○……使える用例。
×……使えない用例。
?……ふつう使わないだろうと思われる用例。

(a) 当該語が使えない例文を、類義語を使って言い換える。
(b) 類義語が使えない例文を、当該語を使って言い換える。
(c) 当該語も類義語も両方使える全く同じ例文を掲げ、両者の意味・ニュアンスの違いを記述する。

ことに、(c)の、全く同じ例文を掲げ、当該部分だけを当該語と類義語とに置き換えて、その意味・ニュアンス、暗示されている心理の違いを記述する方法は、本書で初めて試みた、記述の大きな特色のひとつをなすものである。これによって、客観的な記述のむずかしい「形容詞」の意味・ニュアンスを、かなり正確に把握することができるようになった。

③ ニュアンスや心理を表すキーワードの設定

「形容詞」の「意味の肉」は、桃の実の味わいが甘味や酸味などの味の要素が複雑にからまりあってできた味であるのと同様で、もともと制約のあることばというものを使って説明するのがむずかしい、日本人の心理やものの考え方の反映された部分である。

そこで、この「意味の肉」にあたる部分を解説するのに、要素としていくつかのキーワードを設定し、これらを組み合わせて、複雑な「意味の肉」の味わいを説明しようと試みた。

解説文や類義語との比較の説明文の中に、「□□の暗示をもつ、□□のニュアンスを含む」という表現がある。この□□にあたる部分が、そのキーワードである。このキーワードには、日本人の心理を表す単語を特に選定し（索引の項目として収録）、これらのキーワードがどのように組み合わされて、「意味の肉」にどのような味わいを付け加えているのかを分析しようと試みた。おもなキーワードは次のとおりである。

調和・適合・不遜・尊大・尊敬・謙遜・丁寧・愛情・賞賛・感嘆・感動・慨嘆・怒り・侮蔑・嫉妬・あきれ・驚き・憎悪・嫌悪など

また、心理以外にも、「意味の肉」を記述するのに特徴的な、日本文化に関連する用語もキーワードとして設定した。たとえば次のようなものである。

外見・内面・幼児性・義理・縁・恩・恥・人間関係・他人の目など

七 参照項目について

各語の最後には、⇩の後に当該語と関連する参照項目

を掲げた。この参照項目には、当該語の類義語・反対語のほか、当該語を使った複合語または造語成分で、本書に収録されているものはすべて紹介した。

「形容詞」の複雑な意味の実態に即した関連語が、明確にわかるようになっている。

八　巻末の付録について

① 現代形容詞イメージ一覧

本書に掲載されたすべての見出し語について、その意味区分（(1)・(2)のレベル）ごとのイメージを一覧表化したものである。＋－などの記号は、六①「イメージ表記」に従ってある。この一覧表によって、日本人はどのようなイメージをいだいて「形容詞」を用いているか、その全体像を把握することができる。

② 下接要素による分類語構成表

本書に掲載された見出し語中で、下接部分に同一の語形をもつものをグループにして分類し、それぞれを五十音順に配列した。「―ぽい」「―らしい」「―やか」などの語尾をもつ語や、「○×○×しい」の形をもつ形容詞など、語形と語構成の面から日本語形容詞を研究するのに有益である。

③ 索引

本書に掲載されたすべての見出し語、関連語、関連項目を五十音順に配列して、索引とした。この索引の大きな特徴は、見出し語と項目の区別をつけ、項目のそれぞれに文体、主体・対象、意味ジャンル、キーワードのマークを付したことである。

すなわち、見出しとして掲げられている語の見出しページは太字の数字にした。それ以外のページ、および見出し以外に本文中に登場する語は、細字で掲載してある。

項目の先頭についているマークの内容は次のとおり。

……「文章語・日常会話・俗語・方言」など、文体に関する項目。

……「男性・女性・子供・弱者」など、使用者・対象などの人間に関する項目。

……「大小・温度・色彩・新旧」など、意味のジャンルに関する項目。

……「賞賛・感動・怒り・他人の目」など、「意味の肉」でキーワードと呼んだ、心理やニュアンス・文化に関する項目。

これらのマークをたよりに語を探すと、たとえば、俗語の「形容詞」、女性や子供に使う「形容詞」、色彩を表す「形容詞」、賞賛の暗示を含む「形容詞」など、従来の国語辞典では不可能な立体的な角度から、日本語の「形容詞」を類別して分析することができる。

日本人の感情や心理・文化を客観的に記述していくのは非常にむずかしい。しかし、本書で示した方法で「形容詞」の意味を分析していくことによって、これらに直接ふれることができるのである。

【参考文献】

「日本国語大辞典」日本大辞典刊行会編　小学館　一九八四年（縮刷版）

「広辞苑」新村出編　岩波書店　一九八九年（第三版）

「日本語大辞典」梅棹忠夫・金田一春彦・阪倉篤義・日野原重明監修　講談社　一九八九年

「大辞林」松村明・三省堂編修所編　三省堂　一九八九年

「学研国語大辞典」金田一春彦・池田弥三郎編　学習研究社　一九七八年

「三省堂国語辞典」見坊豪紀主幹　金田一京助・金田一春彦・柴田武編　三省堂　一九八六年（第三版）

「新明解国語辞典」山田忠雄主幹　金田一京助・柴田武・山田明雄編　三省堂　一九八九年（第四版）

「例解新国語辞典」林四郎編修代表　野元菊雄・南不二男・国松昭編著　三省堂　一九九〇年（第三版）

「岩波国語辞典」西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫編　岩波書店　一九八八年（第四版）

「角川新国語辞典」山田俊雄・吉川泰雄編　角川書店　一九九〇年（九〇版）

「新潮国語辞典―現代語・古語」久松潜一監修　山田俊雄・築島裕・小林芳規編　一九八四年（新装改訂版）

「現代国語例解辞典」林巨樹監修　尚学図書編　小学館

一九八九年（初版）

「福武国語辞典」樺島忠夫・植垣節也・曽田文雄・佐竹秀雄編　福武書店　一九八九年

＊　＊　＊

「プログレッシブ和英中辞典」近藤いね子・高野フミ編　小学館　一九八八年

「ライトハウス和英辞典」小島義郎・竹林滋編　研究社　一九八八年

「コンプリヘンシブ和英中辞典」長谷川潔・堀内克明・桃沢力・山村三郎編　旺文社　一九八九年（重版）

「ニュー・アンカー和英辞典」山岸勝榮・郡司利男編　学習研究社　一九九一年

＊　＊　＊

文化庁「外国人のための基本語用例辞典　第二版」文化庁、一九八七年

「日本語百科大事典」金田一春彦・林大・柴田武編　大修館書店　一九八八年

「日本語尾音索引」田島毓堂・丹羽一彌共著　笠間書院　一九八九年（普及版）

「類語国語辞典」大野晋・浜西正人著　角川書店　一九九〇年（四版）

「類語活用辞典」磯貝英夫・室山敏昭編　東京堂出版　一九八九年

「基礎日本語辞典」森田良行著　角川書店　一九八九年

＊　＊　＊

「ことばの意味――辞書に書いてないこと」1～3　柴田武・國廣哲彌他著　平凡社　一九七六～八二年

「形容詞の意味・用法の記述的研究」国立国語研究所　秀英出版　一九七二年

「動詞・形容詞問題語用例集」国立国語研究所　秀英出版　一九七一年

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com